
ペコの気持ち

須磨彰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペコの気持ち

【Nコード】

N2064H

【作者名】

須磨彰

【あらすじ】

再転の姫君に出てくるツンデレワンコであるペコ。この子がどんな風に秋と接しているのかを書いてみました。読み切り短編集とすることも考えましたが、今後番外として再転の姫君と同じようにUPしていくように考えています。

スロの気持ち001（前書き）

シンデレワンコ注意報。

ペコの気持ち01

ペコの気持ち01

『私はビーグル犬の子犬。まだ名前は決まっていなわ。みんなワンちゃんとか呼んでいくけど、どうでもいいわ。』

「お母さんこの子欲しいよ。」

『今日も来たわね。最近この子私のことを見ていくのよね。私はもう少ししっかりと世話ができる子じゃないとお断りなのよ。』

「ダメよ。その子は結構大きくなるから、こっちのチワワならいいわよ。」

『ふん、悔しくないんだからね。こっちから願い下げなんだから。』

「かわいい。この子ならいいの？今日からうちの家族だよ。」

『抱っこされてしっぽフルなんて私にはできないわ。全くみんな何考えてるのかしら。』

「キュンキュン（またあのビーグルの子チワワに負けたみたいだね。）」

「クーン（この前ポメラニオンの子にも負けてたよ。一番の古株だね。）」

「ワンワン（うるさいわよ。聞こえてるんだから。）」

『ムカつくわ。私は相手を選んでの。誰にでも貰われていくような子たちと一緒にしないでほしいわ。』

「君、一人ぼっちなの？」

『え？誰かしらこの子。初めて見るけどなんだか温かそう。』

子犬の前には小学六年生くらいの女の子が立っていた。

ゲージの中で子犬と触れることができるコーナーなのだが、一匹と一人だけがそこにいた。

「ボクも今一人なんだ。最近心友ができたけど、二人以外には中々仲良くできなくなってるね。」

「キューン」

『え？私がこんな声出しちゃうなんて、今は無しよ。私は媚びたりなんかしないんだから。』

「そっか、君もボクのこと分かるんだ。ボクと一緒にいたら不幸になっちゃうかもしれないんだ。それでもいい？」

そう言うと女の子は子犬を抱きあげた。

『なに言ってるのかしらこの子。』

確かに他の人とは何か違う雰囲気があるけど、すっごく純粋な心が見えるわよ？』

「えへへ。ホントに可愛いね。是非うちの子になってくれないかな？」

『なんだか知らないけど、別にあなたならいいわよ。しょうがないから家族になってあげるだけなんだからね。』

「ありがと、ボクって動物みんな大好きなんだけど、動物ってみんな勘が良いからボクでも良いって言うてくれる子少ないんだ。」

犬と人間の違いなのだろう。
理性が働くゆえに見ることができないところも、犬には見えるのか
もしれない。

「お母さん。この子にするわ。名前も今決まったわ。」

「もっと選ぶと思ったけど早かったわね。」

「うん。この子を見た瞬間この子しかありえないってわかったの。」

「そう、名前が決まったって言ったけどなんて言うの?」

「ペコだよ。」

『ええええ?ペコ?なんでそんな名前になるのよ。』

私にそんな平凡な名前つけるんじゃないわよ。もっときらびやかな
名前はないの?』

ペコと名付けられた子犬は目を潤ませているが女の子は気付かない。

「ペコ、君はボクの運命の犬だから。きつと大切にするから仲良く

してね。」

『もう決まっちゃったのね。まあいいわ。仕方ないから仲良くしてあげるわよ。』

「そつだ、自己紹介がまだだったね。ボクは蟹津秋だよ。ペコも蟹津ペコだから、秋って呼んでね。」

『天然かしら？犬の声帯じゃ人の言葉なんて話せないわよ。』

ペコは秋の口を舐めてしっぽを振った。

「一人ぼっちでいたのに甘えんぼさんなんだね。今度からは家族に甘えて良いんだよ。」

『甘えたんじゃないわよ。挨拶よ挨拶。』

秋ちゃんには教育が必要ね。犬のことをしっかり覚えてもらわなくちゃ。』

「秋、帰るわよ。」

「はあい。」

そのあと秋と好美はペコを引き取るために店員に話をつけ料金を払うと、車で家に向かった。

「お母さん、コンビニによってくれない？カメラ持ってきたのにフィルムが入って無かったの。」

「あら。ごめんなさい。この前運動会の際に全部使って忘れてたわ。」

「ペコの記念写真を撮るからお願いね。」

『綺麗にとらなかつたら承知しないんだから。』

「ペコならきつと可愛く・・・撮れるわよ」

『まあ子犬の時はそれで我慢して上げるわ。大人になったら綺麗に撮るのよ。』

「ほんと可愛いなあ。」

秋はそう言つとペコに頬ずりをはじめ、ペコが家族に加わつた嬉しさを目一杯表現した。

『ま、悪くはないわね。これからお姉さんにしっかりついてくるのよ。』

「ボクにもやつと妹ができたんだね。」

『私がお姉さんに決まってるでしょ。』

ペコの肉球が秋の顔に当たるとくすぐつたそうにしていた。まだ子犬のペコの柔らかい肉球では秋にダメージを与えることにはできない様だ。

『まあいいわ。これからよろしくね秋ちゃん。』

ペコの気持ち01（後書き）

このワンコ、シンデレレ過ぎる気がするんですが・・・

再転の姫君のカテゴリのシンデレレはあくまで秋のキャラのはずなのですが、秋よりシンデレレな気がします。

まあ、飼い主に似ると言いますし、というかこの話の場合シンデレレがシンデレレを見つけて意気投合？

と、とにかくペコとの出会いでした。今後もペコはお気に入りなのでちよくちよく本編の方でも出てくるかと思えます。

入力の保持時間 (前書き)

シ...シ...シ...シ...シ...シ...シ

ペコの気持ち02

ペコの気持ち02

今日はペコが蟹津家に来てから初めての休日、庭で武満と利也が何か作業をしている姿を秋の膝の上で丸くなりながらペコも見ている。

「ペコの城がもつすぐできるからね。」

『城？私の城ってことはどこから敵が攻めてくるのかしら？』

「お父さんはとっても器用だから、きっと完成したらペコも気に入るよ。」

『お父さんは？武兄さんのことはあえて言わないのね。』

利也が一生懸命指導しているが、武満のハンマー使いはどう見ても普段から慣れていないぎこちない動きだった。

「痛！」

「大丈夫？武兄ちゃん？」

武満がハンマーで指を打ちつけてしまい、心配した秋はペコを膝から下ろし、二人の方へ寄って行く。

「お兄ちゃんは受験生なんだから、ボクが交代するよ。」

「秋、受験生だからって、心配することはないよ。」

武も男の子なんだから、日曜大工くらいできるようになっておかなくてはいけないんだから。」

利也はそうは言ったものの、結局秋と交代することになった。

『あら？秋ちゃんつてすつごく手先が器用なのね。これなら最初から武兄さんじゃなくて、秋ちゃんに作ってほしかったわ。』

ペコは指を気にしながら横に座った武満を慰めるべく近寄っていく。

「ペコのお家もつすぐ完成するからな。お兄ちゃんが作ってあげたかったんだけど、ごめんな。」

武満がペコの鼻先に手を伸ばしてきたのをペコはなめている。

『別に武兄さんが謝ることじゃないわ。それに秋ちゃんの方が上手みたいだしね。』

ペコの考えなど分からない武満はペコの愛らしさになごんでいた。

しばらく経つと、秋は犬小屋を完成させたらしくペコに手まねきをしながら呼ぶ。

「ペコ〜。おいで。」

ワンワン

『完成したのね。仕方がないからどんなものができたのか見てあげるわ。』

ペコのしっぽは、はちきれんばかりに振られていた。ペコも小屋にばかりかかりきりの秋に呼ばれたのが嬉しかったのだろう。

『べ、別に小屋なんか嫉妬してなんかいないんだから!』

「どつ？ちよつとペコには大きいかもしれないけど、すぐに大きくなるよね？」

秋の声もどこ吹く風といった様子で、ペコは小屋の様子を眺めると、ヒョイと小屋の中ではなく、屋根の上に登ってしまった。

ワンワン

『良い城じゃないの。』

「屋根の上じゃないよ。中にはいるんだよ。」

秋はペコのことを抱きあげると、小屋の中にペコをおろした。

『え？敵に備えて見晴らしがいいように上に乗るんじゃないの？』

「スノーピーじゃないんだから、屋根の上に乗るんじゃないよ。中に入って寝るための小屋だよ。」

『ええ？じゃあ、これからは秋ちゃんもここに寝るの？』

今まで、秋の部屋で寝ていたペコは、秋も一緒にここで寝るものと考えていた。

完成後、二か月ほど結局小屋はペコが屋根に登るためだけに使われ、夜中になると鳴き出すペコを仕方なく秋の部屋に入れてあげる蟹津家の面々であった。

「ペコは甘えん坊さんだね。」

『ち、違っわよ。秋ちゃんが寝れないといけないから一緒に寝てあげるだけなんだから。』

ペコの気持ち02（後書き）

かわいすぎい〜。

なんでこんなにペコって可愛いんでしょう。

AKIも実家で犬と猫を飼っており、動物は大好きです。その子もめちゃくちゃツンデレで、昔は「おいで」と呼ぶと、ダッシュでこちらの方に走ってきて、そのまま通りぬけて行くというツンデレっぷりを発揮しておりました。

あ、その話もペコでやれば良かったかな？

と、とにかく。ペコの代わりに、家のワンコをブログの方にUPしておきますね。

レポートの取持ち番号 (前書き)

レポートの取持ち番号。

ペコの気持ち03

ペコの気持ち03

「ペコ」。お散歩行くよ。」

今日も秋はペコを連れてお散歩に出かける。小学校が終わると、司や竜と用事がない限り、直帰しては、ペコと一緒に出かけ、夜夕日が沈み切るまで一緒に遊ぶのが日課となっている。まあ、日もだんだん長くなってきているので、ペコとしても秋と一緒にいられる時間が増えて喜んでいるのだろう。

「仕方がないわね。秋ちゃんがどうしてもって言うなら今日も一緒にいてあげるわよ。」

ペコの尻尾ははちきれんばかりに風を切り、左右に振られている。

「べ、別に嬉しくって振ってるわけじゃないのよ。それに、運動不足になったら困るでしょ。」

いや、別に喜んでてもいいんだけどね。そんなわけで、秋とペコは

一緒にお散歩だ。しばらく歩いていると、住人から挨拶をかけられる。

これもよくあることで、秋は地元では結構有名人で、いつも元気にあいさつをする蟹津さんところのお嬢さんとしてご年配の方々からは好評で、時々お菓子や飲み物などを奨めてくる人もいるくらいだ。

「あら、秋ちゃんこんにちは、犬なんて飼いだしたんか。どうりで最近うちの司んとこにこんわけじゃな。最近では竜くんしか来てくれやんからおばあちゃんも心配しとったで。」

「司のおじいちゃん、こんにちは。遊びに行つてなくても、学校であつてますから、それに、ボクと竜と司は心友なので、また機会があつたらお邪魔しますね。」

「ほうか。ほんまに秋ちゃんはええこやな。」

「えへへ。ありがとうございます。これでももうすぐ中学生なんですよ。」

「あの秋ちゃんが中学生になあ。そりやみちがえるほどのべっぴんさんになるわけやわな。」

「べっぴんさんだなんて、ボクは昔から男勝りな秋のままですよ。」

「そんなことはあらへん。ほんまにめんこうなって、麻美ちゃん二人で祭りの時は巫女さんしとったときは、ほんまに天女さんが降りて来たんかと思たわ。」

「天女だなんて大袈裟ですよ。地域に麻美とボクしかいなかったんで仕方ないですが、麻美みたいな可愛い子の横でボクなんかが立ちやっけて申し訳なかったです。」

『天女ってなんだろう？』というか、私の情報源って武兄さんの愚痴とお母さんのおしゃべりと、こうして秋ちゃんがいるんな人に話しかけられた時の話題しかないのよね。』

「そんなことあらへんよ。秋ちゃんも十分べっぴんさんやった。むしろ、おったまげとったんや。」

「もう、おじいさんったらそんなに褒めても、ボクは司のところに嫁に行く気はありませんよ。」

「それは残念じゃの。まあ、また遊びにおいで、まんじゅうでも用意してまっとするでな。」

「はい、では、ペコの散歩の途中ですのぞ。」

秋は司の祖父との会話を終えると、ペコを伴って散歩を再開した。話している最中かまってもらえずに不安そうだったペコも、歩きだすと、自分が秋の道案内をするんだと一生懸命リードを引っ張りだす。

「そんなに急がなくても道は逃げないよ。ほら、こっちに来て一緒に歩こ。」

秋がリードを手繰り寄せると、ペコは秋の側を歩き出す。

「ふん。秋ちゃんがさみしいって言うから一緒に歩いてあげてるんだから。」

ペコの尻尾は依然として左右に揺れている。秋との散歩を楽しんでいるのだろう。

小さな用水路の側で秋は立ち止まると、ペコと一緒にそこに腰かけた。田舎の海良町は田に水を引くためにこつした輸水が多数引かれており、歩き疲れたペコはそこで水分を補給したりしてくつろぐのだ。

「秋ちゃんって体細いのに体力あるわよね。私の方が先に疲れてる

なんて、本当に人間とはいえ魂の結合がしっかりしてると違うものね。』

魂の結合だけが理由ではないのだが、人体の構造までペコでもわからないので、そんな風に考えても仕方がない。

「あ、竜。どうしたのこんな時間に？」

すると、向こうの方から竜が自転車に乗ってやってきた。

「秋？さっきまで司の家におったんや。ペコの散歩か？」

『なにこいつ？私の秋ちゃんに馴れ馴れしくしちゃってガッルル。』

「なんか、ペコが敵意むき出しな気がするんやけど気のせいか？」

「あはは、前にあった時はそうでもなかったのにね。ペコ、竜だよ。覚えてない？」

『ふん。秋ちゃんに馴れ馴れしい男の記憶なんてとっくの昔に捨てたわよ。』

実際は竜のことをペコは覚えている。しかし、その時も竜と秋の仲の良い関係を見て、嫉妬していた。この賢い？ワンコは竜を本能的に秋を奪う敵とみなしたのだった。

「ペコつても覚え良いからこんなことないのに、変だな。」

「まあ、そのうち慣れるやる。俺と司はしょっちゅう秋と一緒にいるんやからな。」

「それもそうだね。もう帰りつてことはこのあと何かあるの？」

「何言うとんねん。今日は道場やる？秋も今日は来るんやないんか？」

「ああ、忘れてた。じゃあ、ボクらも帰ろっか。」

『ええ？もう帰っちゃうの？いつもならもつと一緒に遊ぶじゃないの？』

これにより、ペコの中で竜は秋とペコの仲を割く悪者という情報がインプットされ、今後竜が訪れるたびに吠えるという習慣が定着するのであった。

ペコの気持ち03（後書き）

ペコは女の子です。でも秋のことが大好きです。

え？百合？ペコは犬だし・・・

とにかくツンデレワンコ（ペコ）は竜を敵とみなしたわけです。本編でもそうですが、竜の敵って秋loveが99%以上ですよ。まあ、逆もしかりといった感じではありますが。

お家もできて、散歩も行ったので次回は躰でもしてみようかとおもいます。

ツンデレなのに躰なんてできるのか？

ペロの気持ち04（前書き）

シンデレラ王子のしつけ方？

ペコの気持ち04

ペコの気持ち04

「ペコ。ご飯だよ。」

『お腹すいたわ。早く食べさせてよ。』

「お座り、待て。」

ペコの躰をしようと努力している。こういうのは早いうちからやっておくと、覚えが良くていい。しかし、ペコは元々少し大きくなっ
てから蟹津家に来ている。

『また、それなの？次は握手でしょ？仕方がないわね。』

「まだ、お手言っていないのにい。」

『どうせ、次に言うんだからいいじゃないの。』

「じゃあ、お手、次おかわり。」

『はいはい。なんで人間って逆の手でまで握手したがるのかしら。武兄さんはこんな面倒なことしないでご飯くれるのに。』

武満は秋が頑張っつて躑をしているというのに、お座りすらさせないでご飯を与えてしまう。

「今日は次のレベルもやるわよ。伏せ。」

『ええ？伏せたらご飯食べられないじゃないの。』

「ありゃりゃ、やっぱりご飯前はやってくれないか。お家の中だと伏せどころかいろんな芸してくれるのになあ。」

『芸って何よ。秋ちゃんをお願いするから色々やってあげてるんですよ。』

「秋い。私たちのご飯の前にペコに餌をあげないでっていつも言ってるでしょ。」

庭の様子を見にきた好美に秋は見つかってしまふ。

「だって、お散歩いってペコがお腹すかしてるんだもん。ご飯の器をくわえてこつち見てたらあげなきやつてなつちゃうよお。」

「ダメよ。ご飯を先に与えると、上下関係を間違えて覚えてしまうから。私たち家族が偉いってペコにきちんと教えてあげないと、それも一つの躰なのよ。」

「うん。ペコって賢いから、家の上下関係なんて分かっていると思うよ。お母さん>越えられない壁>お父さん>武兄ちゃん>ボクって順番になつてると思うよ。」

「秋ちゃんって>(小なり)なんて言葉良く知ってるわね。というか大正解よ。ついでに、私>秋ちゃんが抜けてるわよ。」

「もう、ちゃんとペコちゃんも入れてあげなきやダメでしょ。そうね。秋ちゃんの次にペコちゃんってきちんとわからせてあげなきやダメでしょ。」

「ええ？私の方がお姉さんなのに。」

「うん。大丈夫だと思うよ。ペコってボクの言うとききちんと聞いてくれるもん。」

「そんなこと言ったら武もお父さんも一緒でしょ。言うことを聞いてくれるなんて言ったら、私・秋・お父さん＝武の順番になっちゃうじゃないの。」

「お父さんは結構頑固で聞いてくれないことがあるよ?」

「それは秋相手だからよ。私相手ならうまく言いくるめれば聞いてくれないことなんてほとんどないわよ。」

その時、車が入ってきて、利也と武満が帰ってきた。

「おかえり。ちょうどあなたたちの話してたのよ。」

「ん?俺たちの話?」

「そうよ。ペコが家の上下関係をきちんと理解してるかって話になって、お父さんの順番は二人ともわかりきった場所だけど、武はどこに入るのかって話になってね。」

「なるほど、武は秋に甘いところをペコも見てるから分らないよな。まあ、一家の大黒柱の位置はペコも理解してるってことか。」

利也は、一番上が好美であることが家族の中で暗黙の了解になっていることに気づいていない。好美も、利也をうまく立てながらも家族を牛耳っているのに、にこやかに誤解を解かずにいる。

「お父さんは相変わらず、上手くお母さんの尻にしかれてるのね。」

「あら、私は体重重くないから気付かないのよきつと。」

『良く言っわよ。お母さんにだけは逆らわない方がいいわね。』

「なあ、俺の順番ってお父さんより低いんだよな?」

武満のこの発言は暗に利也が一番で無いことを理解している発言である。

「ええ、流石に武はお父さんを超えるのはまだ早いわ。というか、秋の言っことを聞いてしまっって意味では秋に負けてるかしら。」

「でもさ、それを言ったらお母さんも怪しくない?滅多に頼みごと

しないとはいえ、秋に頼みごとされたらうなずいちゃうでしょ？」

『そういえば……』

「そういえば……」

「え？っていうことは、ボクが一番？」

「うーん。秋がおねだり上手っていうのは間違いなく家族で一番だと思っぞ。でも、きちんとした上下関係っていうとやっぱり、ペコ・秋・俺の順番だろうな。」

「そうね。秋は結局甘え上手ってだけで、お兄ちゃん子だものね。」

『なるほどね。私・秋ちゃん・武兄さんの順番なのね。』

武満は上二つを明言することを避けて、下から順に言ったのだが、ペコにはそれが伝わらず、ペコの中に間違った蟹津家上下関係図がインプットされるのだった。

『まあ、お姉さんだし、秋ちゃんのお願いは聞いてあげるわ。』

べ、別に秋ちゃんにお願いされると断れないわけじゃないんだから。

ペロの気持ち04（後書き）

全く間違った順位を覚えてしまいましたね。

しかし、利也の順位に関しては……

まあ、本人は一家の大黒柱として意識しているわけで、問題ないでしょう。

好美も牛耳っているとは言っても、利也とラブラブなので、きちんと立てる所は立てています。

しかし、秋のおねだり上手は、ツンデレワンコも躡けるとかあ……

本当の意味で秋が人外化してきましたね。

和也の時にはできなかった甘えるという行動が、秋には簡単にできてしまうようです。

というか、竜に一途でなかったら、それこそ、ハーレムとか作って一生遊んでいても問題なさそうです。

秋の小悪魔的魅力で骨抜きって話も今後機会があったら書きたいですね。

プロの気持ち05（前書き）

軽く次回のネタバレになっています。

ペコの気持ち05

秋との対話

「ペコ聞いて、今日ね学校でね」

『はいはい、またあの男の話なんでしょ。』

「このところ、ペコに話しかける時の話題がほぼ竜の話になっていくことに、秋は気付いていない。ペコはそんな秋の様子に飽きれながらも垂れた耳を傾ける。

「それでね。遊園地の時もそうだったんだけど、お化け屋敷に入る時、ギョツて手をつないでくれたんだよ。もう、本当に怖かったんだから。おうちではペコたちが守ってくれるけど、その代わりに武兄ちゃんがいるからねえ。」

『相変わらずお化けが怖いよね。私からしたら、そんなに魂の結合がしっかりしてる秋ちゃんの方がよっぽど怖いわよ。っていうか、また前よりも結合がきれいになってない？前までは、珍しく綺麗な

融合状態って程度だったけど、今はあり得ないほど綺麗にくっついちゃってるわね。』

「ちょっと、よそ見しないで聞いてよ。それでね。麻美と司がボクのこと騙して酷いんだよ。」

『いや、犬に話しかけてる時点で余所見とかの前に理解してると思っただけで話してるわけ？』

「もう、ペコったら。そんなに他ごとが気になるの？もういいもん。お母さんに聞いてもらうんだから。」

「クーン。」

『本気で私の考え読めるのね。ごめんなさい。ちゃんと聞くから話していいわよ。』

嫌いな竜の話題ばかりとはいえ、秋に構ってもらえないよりは、話を聞いていた方がいいので、何とか食い下がろうとするペコだった。秋ラブはここに極まるか？

「もう、そんなに甘えちゃって。しょうがないな。じゃあ続き話してあげるね。」

『別に話なんてどうでもいいんだけどね。』

ペコはしっぽをフリフリ秋の膝にすり寄ると、先ほどと同じように甘えだした。随分大きくなったとはいっても元々ビーグルという犬種はそれほど大きくはなく、秋の膝の上に乗ることだって可能だ。

「ペコはいつまでたっても甘えん坊さんだね。」

『ち、ちがうわよ。秋ちゃんが私に甘えてるの!』

「それでね、そのあとみんなで花火を見ることになってたんだけど・・・」

そのまま、十分ほど秋はペコに独白していると、ご飯の時間になったようで、好美に呼ばれる。

「はあい。聞いてくれてありがとう。みんなには内緒よ。」

『犬が話せるわけないでしょ。全く私を妹と勘違いしてるんだから・
・
・
・
・』

妹って何よ!! 私はお姉ちゃんなんだから!!』

ペコの気持ち05（後書き）

再転の姫君のネタバレになっておりますので、微妙かもしれません。

一応詳しくは書いていないのですが、それでも・・・

まあペコの気持ちの趣旨がネタバレだし、大丈夫でしょう。

しかし、ツンデレワンコはかわゆすぎますね。

こんな可愛いワンコがいたら撫で撫でしてしまいます。というか、AKIはペットショップとか大好きです。ショーウィンドウから出して抱っこさせられるサービス満点のお店に行くともう、小躍りしながら抱っこします。

次回のペコの気持ちは長編を予定しております。というか、今までの文章量と違ってクリックすると驚くことになるかと思えます。

ペロの気持ち06 (前書き)

再転の姫君の裏でこっそり投稿します。

ペコの気持ち06

ペコの気持ち06

「行ってきまあす」

「ワンワン。」

『いつてらっしやい。』

最近の秋は中学生になって忙しくなり、朝と帰りにペコとあいさつをする程度で、あまりペコのことを構っていられなくなった。そのため、この朝の挨拶に反応するのは、自分を忘れられないようにとペコなりに必死な行動と言える。

『今日も、朝早くから起きていたのに、私のところに来たのは、お弁当と朝ご飯の匂いをさせて私のごはんを運んできただけなのよね。』

しかも、そのお弁当の匂いの原因が、しばしば宿敵である、竜のためものだとペコが知ったら黙っておかないことだろう。

『最近の秋ちゃんって、本当に夜遅くまで帰ってこないし、帰ってくる時はいつともあいつと一緒なのよね。』

『私の見てる前で写真を撮ったり、最近真赤になって秋ちゃん帰ってくることも多いけど、何か体調壊すようなことしてないかしら？』

ペコの心配は分かるが、写真を撮ったり真赤になっているのは、秋が竜を意識しただけであり、問題なんて全くない。むしろ、不健全なまでの恋愛音痴だった秋が意識しただけでも良いと言えるのではないだろうか。

その日の帰り、秋は帰ってくると、久しぶりにペコとお話をする。

『ペコにこうして相談するのも久しぶりだなあ。』

『久しぶりに構ってくれると思ったら、またこの話なのね。』

お互いに久しぶりであることは同じなのだが、その心中は複雑であった。

「まあ、それでね。和美って子がひよっとしたら、ボクのこと嫌い

かも知れないんだよね。そんな風には見えなかったんだけどな。ボクの勘って結構あたるけど、やっぱり怖いよ。」

『秋ちゃんには私がついてるから心配しないで。』

ペコが励まそうと秋の顔をなめると、くすぐったそうにしながらも、秋はお礼を言った。

「励ましてくれてありがとう、今日竜にも守ってやるって言うてもらったんだよ。」

『ま、またあいつの話になるのね。』

結局誤解が解け、何事もなく学園祭が終わると、友人達が蟹津家に集まってきた。

『あら？今日はいつものメンバーよりも多いのね。あいつもいるし、これ以上秋ちゃんに悪い虫がつかなければ良いんだけど。』

『それに、今日は外でちょっと問題が発生したから、あんまり人が来てほしくないんだけどな。』

ペコは直接見たわけではないが、犬独特の鋭い感覚で車庫で起きた悲劇を知っていた。もし今日来た人がその様子を見たら、悲しむことになるだろう。しかし、生き残りがいるとは考えてなかった。

結局、夜中に秋が外に出てきてしまい、現場を目撃され、さらに秋の言葉につい新しい家族を認めてしまった。

べ、別に私は秋ちゃんを一晩中独占したあの子に嫉妬なんてしてないんだから!!

ペコの気持ち06（後書き）

再転の姫君を更新しないと、投稿できないといった理由がご理解いただけたかと思えます。

ジジがペコの気持ちに出てくる会だったため、どうしても本編の方が進まない、投稿することができませんでした。

さて、ペコの秋ラブっぷりをご堪能いただいた皆様に次回からのペコの気持ちの予告をいたします。

実は全10話構成になっており、ちょうど半分が終わりました。ジジの参入で名実共にお姉ちゃんになったペコが今後どのような態度をとるのか、その様子について書いていきたいと思えます。

追伸

ペコのシンデレレ具合はおそらく変化しません。

ペコの気持ち07

ペコの気持ち07

「ワンワン。」

「ニャーニャー。」

今、蟹津家では庭にいる犬と、ブランダの端でくつろいでいる猫が対話をしている。秋たち家族はしらないが、ペコとジジは昼間誰もいない時にこうして会話することはよくあることなのだ。

『毎日家の中で、秋ちゃんに撫でてもらっていいわよね。』

『この前も、秋ちゃんが一緒に寝てくれたよ。』

『まあ、お姉ちゃんだから、それくらい譲ってあげるわよ。私も昔は一緒に寝たりしたけど、卒業したのよ。』

『そうなんだ。お姉ちゃんはやっぱりカッコ良いね。』

『解ればいいのよ。』

『ところで、最近高校にはいつてから、友達が来なくなつたよ。』

『中学の時は、いろんな友達が来て遊んでくれたものね。』

『うん。最近はお兄ちゃんと麻美お姉ちゃんくらいしか来ないんだもん。』

『そうね。前に高校の友達と一緒に和美ちゃんだったかな？あの子は来たけど、他の子は忙しいのかしら？』

実際は、鈴や浩太は帰りに寄つたり、休日に少し来るには微妙な距離があり、電車通学になった二人は中々自転車で蟹津家に来ることができなくなっているだけなのだ。

それに比べて、司や麻美は家も近いため、休日にちょっとした時にちよくちよく遊びに来ている。

『一応電話とかは来てるみたいだよ。この前も鈴って子と電話してたもん。』

『そうなの。ちゃんと友達を大切にしてるのね。』

『あとね。お姉ちゃんが言っていた天敵はいつつも来るよ。』

『また、前みたいに甘えたんじゃないでしょうね？』

『ごめんね。秋ちゃんが抱っこして天敵さんに撫でて良いよって言っただもん。』

『ダメよ。あの男にだけは心を開いちゃダメなのよ。あの男は、秋ちゃんを奪う悪い男なんだから、前にも話したでしょ？』

『うん。お姉ちゃんとデートに出かけている時に邪魔したり、とにかくすっごい悪い人なんでしょ？』

『そうよ。あの竜って男は本当に極悪人なんだから。』

ペコの中での竜という人物が完全なる悪役になっているが、それは単なる嫉妬であって、竜がペコに対して悪さをしたことなど一度もない。

『ねえねえ。じゃあ、秋ちゃんはあの司っていう男の子と結婚するの?』

『ば、まだ早いわよ。秋ちゃんはまだ高校生なんだから、誰とも結婚しないの。』

『そうなんだ。天敵さんと司さん以外の男の子で秋ちゃんとすつごく仲がよさそうな子っていなかったから、司さんと結婚するんだと思ってた。』

『まだまだおこちゃまね。司さんと麻美ちゃんは付き合ってるのよ。だから、結婚するのは司さんと麻美ちゃんなの。』

『そうなんだ。あれ?じゃあ、天敵さんと秋ちゃんが結婚するんじゃないの?』

『そつなのよね。』

『悪者に秋ちゃんが取られちゃつよ。』

『それはダメよ。私たちは秋ちゃんを悪いものから守らなきゃいけないわ。あなたも竜が来たら、ひっ掻いてあげなさい。』

『ええ？引つ掻くと、ご飯がもらえなくなるんだもん。』

『そ、それもそうね。じゃあ、とにかく秋ちゃんと竜を近づけないように、秋ちゃんにまとわりつくのよ。』

『解ったよ。秋ちゃんは絶対に守って見せるね。』

こうして、ワンニヤンワールドによる会話は、今日も秋の話題ばかりで終わるのだった。

『私だって、秋ちゃんにまとわりつきたい……』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2064h/>

ペコの気持ち

2011年7月1日01時46分発行